

# 近世中国語における 動詞“與”から“給”への交替について

植 田 均  
UEDA, Hitoshi

## [摘要]

別稿で「対象」を表す介詞“給”がどの時点で“與”よりも優位に立ち、交替したのかを追究した。

本稿は、動詞“給”がどの時点で“與”よりも優位になり、ついに交替したのかを検討する。

## 0. 前言

### 1. 近世語における動詞“與”の型

#### 1.1. 近世語における動詞“與”の6種の型

#### 1.2. 現代語における動詞“与”の用法

#### 1.3. 問題点

### 2. “與／給+O(VP)”と“VO+與／給+N(VP)”／“V+與／給+N(VP)”

#### 2.1. “與／給+O (VP)”

##### 2.1.1. 通時的差異

##### 2.1.2. 地理的差異

#### 2.2. “VO+與／給+N(VP)”／“V+與／給+N(VP)”

##### 2.2.1. 通時的差異

##### 2.2.2. 地理的差異

### 3. 結語

## 0. 前言

介詞“與”から“給”への交替については拙稿2005で取り挙げた。<sup>1)</sup> 本稿では動詞“與”から“給”への交替について検討する。

実詞及び虚詞の“與”が“給”へ交替した、或いは交替しつつあるのは周知の事実である。解明すべき問題は「(“與”の) どの用法がどの時期に交替したのか」にある。

どの時期に“與”から“給”へ交替したのか。

介詞“與”(=“給”[…のために]; “向”[…に向かって])を取り扱った拙稿2005では『兒女英雄傳』が境界線であると指摘した。<sup>2)</sup> 今回、動詞“與”の場合ではどうか。同様に『醒世姻縁傳』、『紅樓夢』、『兒女英雄傳』等を検討する。<sup>3)</sup>

## 1. 近世語における動詞“與”の型

近世語における動詞“與”の型は、現代語のそれと比較して複雑である。

### 1.1. 近世語における動詞“與”の6種の型

近世中国語における動詞“與”(与える)は次の幾つかの用法がある。<sup>4)</sup> 大きく分けると、以下に示す単音節動詞“與”の①、②型と「中心語動詞+補足語“與”」の複合語“V與”の⑤、⑥型である。但し、[VO與N]型及び[VO與NVP]型から“O”の省略されたのが[V與]型ゆえに、③、④型も⑤、⑥型の中へ入れて考える。

#### ① [與O]型

“與”は単音節動詞であり、“與”の後に賓語が位置するもの。次の例は「間接賓語+直接賓語の二重賓語となる。

每月與他糧食二斗。(『醒』31.6 b.2)

(毎月彼らに食糧を二斗渡した)

#### ② [與OVP]型

“與”の後に賓語が位置し、更にその後に動詞が位置するもの。この“與”は単音節の兼語動詞である。兼語動詞は[與OVP]型の場合、一般に「VPの動作主はOであること」という大前提がある。次の例の“喫”(食べる)の動作主は“你”であって、“我”ではない。<sup>5)</sup>

(珍哥)道:「…。我與你豆兒吃。」(『醒』6.11b.10)

(珍哥は)「…。お前に、豆を食べさせてあげる」と言った)

#### ③ [VO與N]型

“與”の前に“VO”が位置し、“與”の後に賓語が位置するもの。

姜副使説:「…。你把說的那些情節,你就寫一个與我。…。」(『醒』46.6 b.5)

(姜副使は「…。お前の言う告訴状の内容をワシに書いてくれ。…。」と言った)

#### ④ [VO與NVP]型

前の[VO與N]型の末尾に動詞(または動詞フレーズ)が位置するもの。“與”は兼語動詞である。次の例の“喫”(食べる)の動作主は“他們”である。

拿東西與他們吃。(『醒』43.10b.8)

(ものを彼らに食べさせた)

## ⑤ [V與N] 型

前の③ [VO與] 型から“O” (賓語) を省略した型である。<sup>6)</sup>

縣官道：「…。你自去捨與了貧人。」(『醒』23.13b.8)

(県官は「…。お前が貧乏人に恵んでやりなさい」と言った)

## ⑥ [V與NVP] 型

前の④ [VO與NVP] 型から“O” (賓語) を省略した型である。<sup>7)</sup> “與” は兼語動詞である。

晁夫人…拿了十兩銀子，…，二疋白京絹，送與梁生、胡旦做冬衣。(『醒』17.12b.3)

(晁夫人は…十兩の銀子と…白京絹二匹を冬の着物用にと梁生、胡旦に送った)

## 1.2. 現代語における動詞“与”の用法

以上、①～⑥型は近世中国語に見られるものであるが、現代語では動詞“与”はどのように用いられているだろうか。『現代汉语詞典』の“与”項で釈義“給”(与える)を示す項には用例“贈与”、“信件已交与本人”、“与人方便”を挙げる。このうち、“与人方便”は現代語としては四字成語でしか用いられていない。前二者はいずれも複合動詞“贈与”、“交与”である。

以上から、単音節動詞“與”が現代中国語に一般に継承されていないことが分かる。これだけにとどまらず、上記①～⑥型のうち、ほとんどが継承されてない。わずかに⑤(及び⑥) [V與] 型が継承されているにすぎない。

現代共通語に継承されていない場合、一つは“與”の代わりに“給”を用いる。即ち、①～⑥型の“與”の箇所が“給”へ交替したと考えられる。もう一つは、③ [VO與N] 型、④ [VO與NVP] 型等の文型そのものが消滅してしまっていることである。

## 1.3. 問題点

問題点は次の(I)、(II)である。

(I) 『红楼梦语言词典』正文〈正編〉に“與”の動詞用法(単音節動詞“與”及び複合動詞“V與”)が収録されている。ところが、同書正文〈副編〉に“與”の動詞用が未収。

これは、『红楼梦』(前80回)に“與”の動詞用法は存在するが、『红楼梦』(後40回)には存在しないことを表しているのか。即ち、“與”から“給”への交替は『红楼梦』(後40回)で完了したのか。

(II) “VO與(NVP)”型から“O”が省略されると“V與(NVP)”型となる。さすれば、先に“VO與(NVP)”型が存在し、後に“V與(NVP)”型が出現したことになる。では、“VO與(NVP)”型は北方中国語においてどの時期に消失したのか。

以上、二つの問題点を中心に各型を検証する。

## 2. “與/給+O (VP)”型と“VO+與/給+N (VP)” / “V+與/給+N (VP)”

今、“與/給+O (VP)”型と“VO+與/給+N (VP)” / “V+與/給+N (VP)”型に分けて出現頻度を調べた。まず、“與/給+O (VP)”型についてである。

## 2.1. “與/給+O (VP)”

“與/給+O (VP)”型とは上記①、②の如く、“與”または“給”の前に動詞が位置しない型である。

この型の各資料における出現表は以下の通りである。

		醒世姻縁傳	紅樓夢(前80回)	ゞ (後40回)	兒女英雄傳	儒林外史
與	会話	128	6	—	—	33
	地	178	47	—	—	29
給	会話	191	322	83	76	35
	地	22	28	17	44	7

この出現表をもとに通時的及び地理的差異を論じる。

### 2.1.1. 通時的差異

1715年頃成書の『醒世姻縁傳』で比較的多く使用された“與”は1750~60年頃成書の『紅樓夢(前80回)』に到り、大幅に減少した。そして、1791年に刊行された程甲本『紅樓夢』の後40回では全く用いられなくなっている。これに続く1850年頃成書の『兒女英雄傳』でも用いられていないことから単音節動詞としての“與”の消失は『紅樓夢(後40回)』を境とする。したがって、『红楼梦语言词典』の記述は裏付けされたことになる。

〔與O〕型の例。

素姐…：「…。你一定就與了別人。…。」(『醒』65.14b.6)

(素姐は…「…。お前さんはきっと他の人にあげていたんでしょ。…。」と言った)

賈政…：「…。我已經看中了兩個丫頭，一個與寶玉，一個給環兒。…。(『紅』72.18a.4)

(賈政は…「…。ワシが既に見初めた女中が二人いる。一人を宝玉に、もう一人を環兒にやるのだ。…。」と言った)

“與”とは逆に、“給”は会話文に圧倒的多数占められている。とりわけ、『醒世姻縁傳』、『紅樓夢(前80回)』、『紅樓夢(後40回)』がそうである。ここでは“與”はやや生硬な文に、“給”は(卑俗な)会話文に使用」という棲み分けができています。この顕著な資料が『紅樓夢(前80回、後40回)』である。

〔給O〕型、〔給OVP〕型の例。

李九強…：「…。他還給了我兩弔三四百錢，够十兩多銀子。」(『醒』34.11a.9)

(“弔” = “吊”)

(李九強は…「…。あの人は更に俺に二千三、四百錢と十兩余りの銀子をくれました」と言った)

寶玉…：「…。前兒薛大哥哥求了我一二年，我纔給了他這方子。…。」

(『紅』〈前80回〉28.6 a.1)

(宝玉は…「…。以前、薛兄さんに、一、二年もの間ねだられて、ついにこの処方差し上げたんです。…。」と言った)

鳳姐…：「…。原來是和鮑二的媳婦商議，說我利害。拿毒藥給我喫了。…。」

(『紅』〈前80回〉44.7 b.4)

(鳳姐は…「…。何と鮑二のかみさんと相談しているのです。私のことをきつい奴だから私に毒藥を飲ませようと言うのです。…。」と言った)

- 賈母又道：「…。他兩個起身也得給他們幾千銀子纔好。」（『紅』〈後40回〉107.3 b.5）  
 （賈母はまた「…。彼ら二人が旅立つ時には何千両かの銀子をあげねばならないだろう」と言った）
- 寶蟾道：「奶奶給他好東西吃。他倒不吃，這不是辜負奶奶的心麼。」  
 （『紅』〈後40回〉91.3 b.6）  
 （宝蟾は「奥様があの方にお上げになった良き品をあの方はお食べにならないのですよ。これは奥様のお気持ちを無にしたことではありませんか」と言った）
- 公子道：「…。煩你叫他們給我拿進來，我給他幾個酒錢。」（『兒』4.15b.3）  
 （公子は「…。彼らに運び入れてくれるよう呼んでほしいんだ。いくらか酒代くらいはあげるから」と言った）
- 太太道：「告訴他們外頭，好好兒的給他點兒甚麼吃。…。」（『兒』22.17b.2）  
 （奥様は「あの人達に外地のことを教えてあげて。何か十分にお食べなさいな。…。」と言った）

2.1.2. 地理的差異

清代中期（1733～49年頃）に成書の『儒林外史』は、作者吳敬梓の基礎方言が南京という理由もあり、“與／給”の用法が北方語系のほぼ同時期の『紅樓夢（前80回）』とは異なり、“與”を会話文においても相当多く使用という傾向を示す。

北方語系のその他の資料『紅樓夢（後40回）』、『兒女英雄傳』と南方語系の清代資料『儒林外史』、『官場現形記』、『二十年目睹之怪現狀』等とは“與／給”の出現様相が異なり、対立していると見える。

〔與O〕型の例。

- 虞博士道：「…。這十兩銀子，就算我與你的。…。」（『儒』36.11b.6）  
 （虞博士は「…。この十両の銀子は私があなたにあげたものと考えて下さい。…。」と言った）

〔給O〕型の例。

- 馬二先生…：「…。我把選書九十幾兩銀子給了他。…。」（『儒』14.6 b.1）  
 （馬二先生は…「…。私が選書した九十幾両の銀子を彼にあげました。…。」と言った）

2.2. “VO+與／給+N (VP)” / “V+與／給+N (VP)”

“VO+與／給+N (VP)” / “V+與／給+N (VP)”型とは、“與”及び“給”の前に別の動詞が位置し、“與”或いは“給”が補足する如く動詞に添えられる形を指す。この型の各資料における出現表は以下の通りである。

		醒世姻縁傳	紅樓夢(前80回)	〃 (後40回)	兒女英雄傳	儒林外史
與	会話	194	67	7	8	151
	地	272	253	19	3	184
給	会話	177	144	61	127	40
	地	5	15	39	89	6

この出現表をもとに通時的及び地理的差異を論じる。

## 2.2.1. 通時的差異

『醒世姻縁傳』では会話文、地の文ともに多く用いられた“與”は『紅樓夢（前80回）』に到り、先ず会話文で大幅に減少した。しかし、地の文では依然として多数見られる。これは、“與”の用法に会話文と地の文で「口語性と書面性」という異なる意識が強く顕われたことによると思われる。そして、『紅樓夢（後40回）』になると、会話文、地の文ともに更に大きく減少。『兒女英雄傳』ではこの上に衰退現象が進む。しかし、『兒女英雄傳』においても“與”から“給”への「交替の完了」ではない。

各型の例。

〔VO與N〕型の『醒世姻縁傳』からの例。

晁夫人道：「…。如今要分幾畝與他們衆人，正没人立箇字。…。」（『醒』22.9b.2）

（晁夫人は「…。今、何畝かの田畑を彼らに分け与えようとしているのですが、証文を書く人がいないのです。…。」と言った）

狄希陳…：「…。就使一百千錢，我高低買一套與你。」（『醒』65.2 a.6）

（狄希陳は…「…。たとえ百兩、千兩の錢を使っても俺はどうあっても買ってお前に差し出すよ」と言った）

〔VO與N〕型の『紅樓夢（前80回）』からの例。

周瑞家的笑道：「…。送這幾枝花兒與姑娘奶奶們。這會子還沒送清白呢。…。」（『紅』〈前80回〉7.9 a.6）

（『紅』〈前80回〉7.9 a.6）

（周瑞のかみさんは笑って「…。この何本かの花かんざしをお嬢様、若奥様方に届けてくれとのことだね。今、まだ届け終えていないんだよ。…。」と言った）

〔VO與N〕型の『紅樓夢（後40回）』からの例。

賈芸…想起「那年倪二借銀與我，買了香料送給他纔派我種樹。…。」（『紅』〈後40回〉104.3 b.2）

（『紅』〈後40回〉104.3 b.2）

（賈芸は…「以前、倪二が私に銀子を貸してくれたので香料を買ってあの方に届けたら、ようやく私に植樹の仕事をさせてくれた。…。」ことを思い出した）

薛蝌急道：「…。快開八字與我。給他算去，看有妨礙麼。」（『紅』〈後40回〉86.7 b.6）

（薛蝌は慌てて「…。早く八字を書いて下さい。私が兄の為に占って貰いましょう。どんな妨げがあるか見てもらうのです。」と言った）

賈芸便送信與邢夫人，並回了王夫人。（『紅』〈後40回〉108.6 a.5）

（賈芸はその知らせを邢夫人に届け、そして王夫人にも報告した）

〔VO與NVP〕型の『醒世姻縁傳』からの例

晁鳳道：「…。拿東西與他們吃，都是他手裏討缺。…。」（『醒』43.10b.8）

（晁鳳は「…。彼らに食事をさせる等全て彼の手の中から賄ったのです。…。」と言った）

狄希陳…：「…。使幾錢銀買個薄皮材與他裝罷麼。」（『醒』80.4 a.1）

（狄希陳は…「…。何錢か費やして薄い棺桶の板でも買ってあの子を入れてやってらどうだ」と言った）

〔VO與NVP〕型の『紅樓夢（前80回）』からの例。

尤氏、賈蓉一齊說：「…。少不得我娘兒們打點五百兩銀子與嬖嬖送過去。…。」

〔『紅』〈前80回〉68.14b.1〕

（尤氏、賈蓉は「…。必ずや私達母子が五百両の銀子を工面して叔母様にお届けします。…。」  
と言った）

なお、〔VO+與+N (NP)〕型は『紅樓夢（後40回）』までであって、『兒女英雄傳』には見られない。一方、〔V與〕型は、現代語においても少ないながら用いられ、継承されている。したがって、『現代汉语词典』の（“与”項）に“V与”の用例が収録されているゆえんである。

〔V與〕型の例。

秦小姐…：「…。忍得把个女兒嫁了與他。…。」（『醒』18.12b.10）

（秦小姐は…「…。娘の私をその人に嫁にやろうなんて！…。」と言った）

楊春説：「…。你使人叫了我來，莫非要分些與我麼。」（『醒』34.5 a.3）

（楊春は「…。私を呼びつけたのは、ひょっとして私に分けて下さるおつもりですか？」と言った）

鳳姐湊趣笑道：「…。那些兄弟，只留與他。我們如今雖不配使，也別苦了我們。…。」（『紅』〈前80回〉22.2b.8）〔“兄弟”を戚序本活字本では“體己”（へそくり）、程甲本では“東西”（もの）とする〕

（鳳姐は笑いながら「…。それらのご兄弟達の中で宝玉のみ残してあげるのですね。私達は今それを使わせて貰うにふさわしくないでしょうが、私共を苦しめないで欲しいのです。…。」  
と言った）

林之孝家的不敢違拗，只得帶了出來，交與上夜的媳婦們看守，自便去了。

（『紅』〈前80回〉61.9 b.6）

（林之孝のかみさんは不満を言えなくて、仕方なく連れて出た。夜番の女房達に〈五児を〉預け、見張り番をさせ、自分は家に帰った）

### “與”から“給”へ

1.1.1.で示した単音節動詞型①及び②と同様の型における“給”は、会話文に用いられる傾向が『醒世姻縁傳』、『紅樓夢（前80回）』に強く出ている。地の文でも多く見られるようになったのは（“給”がそれだけ広く浸透した証左でもあるが）、時代は清代中期の『紅樓夢（後40回）』、『兒女英雄傳』に到ってからである。

〔VO給N〕型の例。

他娘合媳婦子…説：「他掘了多少。就分些這們些給你。」（『醒』34.6 b.7）

（彼の母親と妻は…「あちらさんはどれだけ掘り当てたの？お前さんにはこれっぽっちくれただけかい？」（と言った）

〔VO給NVP〕型の例。

素姐…罵道「…。我還有好幾頃地哩，買兩頃給他嫖。…。」（『醒』52.6 b.9）

（素姐は…罵って「…。『私にはまだ他に多くの田畑があるから二頃ばかり売ってあの子に女郎買いをさせてやる』なんてね。…。」と言った）

〔V給N〕型の例。

狄希陳道：「…。你只可怜見，明白的說了，我照樣買給你罷。」（『醒』63.5 a.9）

(狄希陳は「…お前は哀れにと思ってボクにはっきり) 言ってくれ。ボクはお前にその通り買ってあげるから」と言った)

〔V給NVP〕型の例。

晁夫人道：「…你叫了晁無逸來，同着他交付給你將了去。」(『醒』57.3b.3)

(晁夫人は「…晁無逸さんをお呼びに来て下さい。その人の前であなたに引き渡してから〈子供を〉連れて行きなさいよ」と言った)

以上は会話文中に用いられている。これら“給”を用いる各型が地の文にも多く出現する現象を呈するのは『紅樓夢(後40回)』、『兒女英雄傳』である。

地の文の例。

寶玉走到床前，賈母便把那塊漢玉遞給寶玉。(『紅』〈後40回〉109.11b.2)

(宝玉が寝台の前に来ますと賈母はかの漢玉を宝玉に渡しました)

也虧他那廠快爽利，便把手裡的手巾摺給跟的人，绷着個臉兒給安老爺道了喜。

(『兒』35.28a.7) (“廠快” = “敞快”)

(さっぱりした性格のお陰で、すぐにあった手拭いをお付きの女に渡し、まじめ腐った顔で安学海にお祝いのことばを述べました)

### 2.2.2. 地理的差異

①及び②の〔與O (VP)〕型が北方語系に多く見られたのと同様、南方語系資料の『儒林外史』に③及び④の〔VO與N (VP)〕型や⑤及び⑥の〔V與 (NVP)〕型の“與”が多く見られる。

『儒林外史』に“與”自体が多いのは作者(及び描写の舞台)の基礎方言が南京という南方語系(官話)であったゆえんである。しかも、作者の筆致が完全な口頭語を写したというよりは(読書人のセリフが多く)技巧的に走った感がある。それゆえか、『儒林外史』は“與”に比べ、“給”字自体の使用頻度が圧倒的に低い。

〔VO與N (VP)〕型の例。

保正…：「…發這帖子與你。…」(『儒』16.14b.3)

(保正は…「…知県がこの招待状をお前に下されたのはだな、…」と云った)

秦老…：「…每日早上還折兩個錢與你買點心吃。…」(『儒』1.2b.4)

(秦老人は…「…毎朝、二錢ほどをお前にあげるから腹の足しでも買って食べなよ。…」と云った)

〔V與N (VP)〕型の例。

潘三道：「…只說荷花已經解到，交與本人領去了。…」(『儒』19.6b.6)

(潘三は「…荷花は護送され、本人の家の者が連れて行った。…」と云った)

現代共通語では〔VO與N (VP)〕型はほぼ消失したが〔V與N (VP)〕型は少ないながらもまだ使用する。しかし、〔V與N (VP)〕型よりもむしろ〔V給N (VP)〕型を使用する。これは“V與”から“V給”へ交替現象がまさしく進行している最中を示す。

ここで注意すべきは“與”から“給”へ交替するだけでなく、“V”と“與/給”が結合しない〔VO與/給NVP〕型そのものが北方中国語では用いられなくなる点である。即ち、“給”の〔VO給NVP〕



型すらも用いられなくなるのである。

### 3. 結語

単音節動詞“與”の出現は『紅樓夢（前80回）』までであり、これ以降の『紅樓夢（後40回）』、『兒女英雄傳』では見られない。

〔V與〕型に先行する〔VO與〕型は単音節動詞“與”よりもやや遅くまで使用される。即ち、『紅樓夢（後40回）』まで出現するが、これ以降の北方語系資料（『兒女英雄傳』等）では見られない。但し、南方語系資料ではこの限りではなく、『儒林外史』などで依然として出現している。このように、官話区域内であっても北方と南方とではやや大きな差が見られる。

### 〔注〕

- 1), 2) 植田2005, p.p. 190-208. 本稿は「近世中国語学会秋季研究集会」（於：大東文化大学板橋校舎。2004年12月12日）にて「近世中国語における並存と交替—『対象』を表す介詞“與”の交替について」と題して口頭発表し、「動詞の（“與”から“給”への）交替」も論じなければならないと考え、まとめたものである。
- 3) 各資料の版本は次の通りである。『醒世姻縁傳』が同徳堂梓『重訂醒世姻縁傳』。『紅樓夢（前80回）』が『紅樓夢（戚蓼生序本80回）』。『兒女英雄傳』が光緒4年北京聚珍堂活字本の影印本『兒女英雄傳』。以上が上海古籍出版社1994年刊の「古本小説集成」版に拠る。『紅樓夢（後40回）』が『程甲本紅樓夢』に拠り、『儒林外史』が臥閑卓堂藏板『儒林外史』に拠る。略称は各々『醒』、『紅』（前80）、『紅』（後40）、『兒』、『儒』とする。以下同じ。  
なお、本稿で挙げた各用例の後の数字、記号は順に章回数、葉数、aはオモテ、bはウラ、行数を表す。
- 4) 大内田1984は、『水滸』に出現する動詞“與”を含む文型を11種に分け細かく分析している。しかし、いずれも“O”の後に位置する“VP”を含む所謂兼語動詞の“與”を除外している。これは恐らく〔與OVP〕型の“與”を兼語動詞と見なさず、介詞“與”と認めるゆえ、意図的に除外したものと思われる。
- 5) 逆に、同じ〔S+與OVP〕型でも“與”が介詞の場合、“VP”の動作主は“S”という大原則がある。例えば、次の例のVP「畫一策」の動作主は“我”であって、“哥”ではない。  
相手廷道：「要不，我再與哥畫一策，…。」（『醒』58.6b.6）  
（相手廷は「もし何だったら僕が兄さんの為にもう一つ策を出してやろうか。…」と言った）
- 6), 7) 冯2000, 291。

### 〔参考文献〕

- 大内田三郎 1984, 「『水滸傳』の言語—動詞“与”について—」, 『人文研究』36巻第3分冊（大阪市立大学）。
- 山田忠司 1999, 「『儒林外史』における“給”の用法」, 『中国語学』246号。
- 2002, 「“給”の解釈に関する若干の考察」, 『中国文化』61号。
- 植田均 2005, 「近世中国語における並存と交替—『対象』を表す介詞“與”の交替について」, 『香坂順一先生追悼記念論文集』, 光生館。
- 冯春田 2000, 『近代汉语语法研究』, 山東教育出版社。
- 周定一（主编）、钟兆华、白维国 1995, 『红楼梦语言词典』, 商务印书馆。
- 中国社会科学院语言研究所词典编辑室 1978, 『現代汉语词典』, 商务印书馆（2002年修订第3版・増补本）。
- 西周生, 『醒世姻縁傳』, 人民文学出版社影印發行本, 1988年1次, 1994年2次版。
- 西周生, 『醒世姻縁傳』, 上海古籍出版社（「古本小説集成」版）, 1994年。
- 曹雪芹, 『紅樓夢』（戚序本）, 上海古籍出版社（「古本小説集成」版）, 1994。
- 曹雪芹, 高鶚, 『程甲本紅樓夢』, 書目文獻出版社, 1992年（影印本）。
- 吳敬梓, 『儒林外史』, 人民文学出版社, 1975年（影印本）。
- 吳敬梓, 『儒林外史』, 上海古籍出版社（「古本小説集成」版）, 1994年。
- 文康, 『兒女英雄傳』, 上海古籍出版社（「古本小説集成」版）, 1994年。

香坂順一1983, 『白話語彙の研究』, 光生館。  
太田辰夫1958, 『中国語歴史文法』, 江南書院。